



令和5年度 教育事業
あかぎ無限大キャンプ 事業報告書



あかぎ 無限大 キャンプ

AKAGI MUGENDAI CAMP



令和6年1月

はじめに

「あかぎ無限大キャンプ」は、文部科学省の委託事業「体験活動を通じた青少年自立支援プロジェクト」として令和4年度から採択され、今年度の令和5年度は2回目の実施となりました。

前身の「限界突破キャンプ」での知見を活かしながら、長期の宿泊体験・自然体験を通じて子供達が多様性を認め合える意識を醸成していくにはどのようなプログラムづくりや指導が効果的なのか、見直しつつ実施してまいりました。

また、眼に関する共同研究についても、慶應義塾大学医学部眼科学教室、株式会社坪田ラボ、近視予防フォーラムとの4者体制での2年目となり、長期の自然体験活動がどのような形で眼に良い影響を及ぼすかについても知見を積み重ねていただいております。

今回の夏は例年を上回る酷暑や不安定な気象状況に悩まされましたが、幸いにもほとんどの日程を当初のプログラムの予定どおり実施することができました。このプログラムがどのような点で効果を上げることができたか、また見直す点はどのような点かなどもしっかり検証し、プロジェクト最終年度となる来年度に向けて取り組んでまいりたいと思います。

本報告書が、青少年教育施設をはじめとする全国の青少年教育関係者の皆様の活動の参考になりますよう、ひいては青少年の体験活動の推進の一助となりますことを祈っております。

国立赤城青少年交流の家 所長 金澤 哲哉

目次

はじめに

1. 事業概要

(1) 事業の趣旨	01
(2) 目指す子供像	01
(3) 令和5年度文部科学省委託事業について	02
(4) 手立て	02
(5) 事業概要	02
(6) 推進委員会の概要	03

2. 事業内容

(1) 日程	04
(2) プログラムデザイン	05
(3) 各キャンプの内容	07
ボランティア研修	07
①事前キャンプ	08
②本キャンプ	09
③事後キャンプ	11
(4) 安全対策	12

3. 調査結果

(1) 当所実施のふりかえりシートからみる参加者の変容	13
(2) あかぎ無限大キャンプにおける社会的能力の変容（2年目） 青木 康太郎	15
(3) 慶應義塾大学医学部・国立赤城青少年交流の家・株式会社坪田ラボ・近視予防フォーラムとの共同研究 小川 護	17

4. 成果と課題

(1) 成果	19
(2) 課題	20
(3) 推進委員より	21
(4) スタッフより	22

1 事業概要

(1) 事業の趣旨

- ①協働的な体験プログラム（野外炊事、赤城山登山、レクリエーション等）を通して、多様性を認め合える意識の醸成を図る。
- ②長期自然体験活動を通して、近視進行の抑制（健康の保持増進）を図る。

(2) 目指す子供像

目指す未来社会像 Society5.0

持続可能性と強靱性を備え、国民の安全と安心を確保するとともに、
一人一人が多様な幸せ (well-being) を実現できる社会

○実現に向けた3本の政策の柱

- ・国民の安全と安心を確保する持続可能で強靱な社会への変革
- ・知のフロンティアを開拓し価値の創造の源泉となる研究力の強化
- ・一人一人の多様な幸せと課題への挑戦を実現する教育・人材の育成

「多様性」「公正や個人の尊厳」「多様な幸せ (well-being)」の価値が Society5.0 の中核であること

「第6期科学技術・イノベーション基本計画」
(2021 内閣府総合科学技術・イノベーション会議)

自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。

「小学校学習指導要領（平成29年告示）前文」

目指す子供像

- ・自分の意見を発言でき、他者の意見を傾聴できる子供
- ・自分のよいところ（長所）と他者のよいところ（長所）に気付ける子供
- ・合意形成をしながら、対話・行動ができる子供

○協働的な自然体験活動プログラム
(野外炊事・赤城山登山・レクリエーション等)

①ゆとりのあるプログラム

- ・他者の特徴を知るための時間
- ・活動プログラムを習得する時間
- ・活動前の話し合いの時間
- ・自分の考えをまとめる時間
- ・一日のふりかえりの時間

②選択できるプログラム

- ・グループの話し合いで決める活動
(レクリエーション・野外炊事・テント設営)
- ・自己決定する活動
(赤城山登山)

○与件

- ・国立赤城青少年交流の家・赤城山エリアでの7泊8日
- ・事前研修をつんだ法人ボランティア6名程度の参加
- ・「限界突破キャンプ」(平成30年度～令和3年度)において、「自分のいいところやがんばりを褒められたこと」を多く経験すると、「根気」に高い教育効果があることが示唆された。

↑

長期自然体験活動を通して

○現代的な課題

- ・インターネット等を通じた擬似的・間接的な体験が増加
- ・人やもの、自然に直接触れるという体験活動の機会の減少
- ・コロナ禍の影響による体験活動の機会の減少

○一般的な小学校高学年の発達の特徴

- ・自分のことを客観的にとらえられるようになる。
- ・自己肯定感を持ち始める。
- ・個人差が大きく自己に対する肯定的な意識を持たず、劣等感を持ちやすくなる。
- ・集団の規則を理解して、集団活動に主体的に関与する。
- ・遊びなどでは自分たちで決まりを作り、ルールを守るようになる。
- ・閉鎖的な子供の仲間集団が発生し、付和雷同的な行動が見られる。

(3) 令和5年度文部科学省委託事業について

本事業は文部科学省の「体験活動を通じた青少年自立支援プロジェクト」の委託を受けて実施された事業である。委託事業の内容である、「子供たちの心身の健全な発達のための自然体験活動推進事業」の趣旨にあるように、安心・安全にリアルな体験活動を行うためのコロナ禍における長期の自然体験活動等のモデル事業として実施した。実施にあたっては、これからの時代を生きる子供たちに必要な新しい時代を築く力を「多様性を認め合うこと」「健康の保持増進（近視の抑制）」と位置付けた。

この力を子供たちが身に付けるため、①協働的な体験プログラムを通して、多様性を認め合える意識の醸成を図ること②長期自然体験活動を通して健康の保持増進（近視の抑制）を図ることを事業の趣旨として実施した。

(4) 手立て

- ①事業を「ファースト」「セカンド」「サード」「ファイナル」の4つのステージに分け、ステージごとにねらいを設定する。
- ②「他者の特徴を知るための時間」「活動プログラムを習得する時間」「活動前の話し合いの時間」「自分の考えをまとめる時間」「1日のふりかえりの時間」を十分に確保するために、ゆとりのあるプログラムを編成する。
- ③「セカンド【獲得・グループ】」ステージで、グループメンバーの個性やよさに気づくため、グループごとに登山を行う赤城山チーム登山を設定する。
- ④「セカンド【獲得・グループ】」ステージで、グループ間の協議が活発になるように、グループの話し合いで決める活動（グループタイム）を設定する。
- ⑤「サード【成長】」ステージで、個人の成長を実感できるように「個人の能力で決める活動（赤城山選択登山）」を設定する。

(5) 事業概要

- ①期日
 - 【ボランティア研修】 令和5年7月1日（土）～7月2日（日）（1泊2日）
 - 【事前キャンプ】 令和5年7月8日（土）～7月9日（日）（1泊2日）
 - 【本キャンプ】 令和5年8月13日（日）～8月20日（日）（7泊8日）
 - 【事後キャンプ】 令和5年9月16日（土）～9月17日（日）（1泊2日）
- ②参加者
 - 【対象】 小学5年生～小学校6年生 24名（男子12名、女子12名）
 - 【人数】 小学5年生男子：4名 小学6年生男子：8名
小学5年生女子：7名 小学6年生女子：5名
群馬県：11名 埼玉県：6名 栃木県：2名 茨城県：2名 千葉県：2名 東京都：1名
 - 【班編成】 1班6名で4班に編制（異年齢集団）
- ③スタッフ
 - ・国立赤城青少年交流の家職員：3名
 - ・ボランティアスタッフ：6名

2 事業内容

(6) 推進委員会の概要

①委員の構成（推進委員2名）（五十音順）

國學院大學人間開発学部 准教授 **青木康太郎**
 慶應義塾大学医学部眼科学教室 特任助教 **小川 護**

②委員会の日程と議事内容

●第1回推進委員会 5月16日(火) オンラインにて開催

(推進委員の役割)

- ・青木委員：事業実施による子供の発育に関する調査及び活動プログラムへの指導・助言
- ・小川委員：事業実施による近視抑制に関する調査

(実施案検討)

- ・今年度も昨年度同様の日程で実施。国立の施設が長期キャンプを行う意味も大きい。
- ・天候等で活動の変更があるかもしれないが、参加者が達成感をもてるよう、メインとなる登山プログラムはできる限り実施したほうがよい。
- ・ボランティアが、事業のねらいを理解していることが大切になる。プログラムごとに何をしたらよいかを理解しながら、時には寄り添い、一方で指導者として活動できるよう、適宜コミュニケーションをとりながら進めてもらいたい。

(調査検討)

- ・青木委員のアンケートは、落ち着いて答えられる場面で実施する。また、アンケート期間が空くと、成果が図りづらいので、本キャンプの開会式直後、閉会式の前、そして事後キャンプの開会式の前に実施する。

●第2回推進委員会 10月3日(火) オンラインにて開催

(事業報告)

- ・「セカンド【獲得・グループ】ステージ」で実施予定だったチーム登山が悪天候のため実施できなかったため、覚満淵の散策をチームごとに行った。当所での活動ではなく、外部に出てチームごとに活動ができたことはよかった。
- ・アンケートや映像資料から参加者の声、様子がよく分かった。事後キャンプは獲得したキャンプの知識や技能が発揮されている様子がよく分かった。

●第3回推進委員会 11月28日(火) オンラインにて開催

(報告書の確認)

- ・プログラムデザインのページを増やし、それぞれのステージの活動の様子や活動のポイントが分かる写真を掲載する。
- ・3. 調査結果の(1) 当所実施のふりかえりシートからみる参加者の発育ページは成果だけでなく、キャンプから見えた課題等もあれば記載し、次年度につなげる。

(来年度の日程案)

- ・当所をベースキャンプにしての活動だけでなく、外の施設に宿泊し、登山できるようなプログラムの検討も必要である。

(1) 日程

●7月1日～7月2日 ボランティア研修

ステージ	4:00	5:00	6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	宿泊場所
1日目 7/1(土)						受付	ボランティア説明	事業概要説明	講義(ボランティアの意義・安全管理)	昼食(食堂)	施設確認(館内)	研修支援体験		野外炊事 たき火(カレー作り)	入浴	つらい退所点検の仕方	就寝	(本館)	交流の家
2日目 7/2(日)		起床	荷物整理	朝食(食堂)	退所点検の確認		赤城山登山 (覚満淵～鳥居峠～長七郎山～小沼)		昼食(小沼・弁当)	帰所後解散									

●7月8日～7月9日 事前キャンプ

(■=グループプログラム、■=個人プログラム、■=共同研究)

ステージ	4:00	5:00	6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	宿泊場所	
1日目 7/8(土)						受付	事前説明会 ※保護者も参加	自己紹介 アイスブレイク ※保護者も参加	荷物整理 荷物移動	昼食(食堂)	レクリエーション (オリエンテーリング)	眼の検査		野外炊事 (カレーライス)	入浴	登山安全確認	ふりかえり 健康観察	就寝	(本館)	交流の家
2日目 7/9(日)		起床	荷物整理	朝食(食堂)	清掃	退所点検	赤城山登山 (覚満淵～鳥居峠～長七郎山～小沼)		昼食(小沼・弁当)	ふりかえり アンケート記入	解散									

●8月13日～8月20日 本キャンプ

ステージ	4:00	5:00	6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	宿泊場所	
1日目 8/13(土)						受付	開会式	アイスブレイク	荷物整理 荷物移動	昼食(食堂)	チームMT① 「どのチームを応援するか？」	眼の検査		野外炊事 (カレーライス)	入浴	チームMT② 「どのチームを応援するか？」	ふりかえり 健康観察	就寝	(本館)	交流の家
2日目 8/14(日)		起床	健康観察 荷物整理	朝食(食堂)	レクリエーション (オリエンテーリング)			昼食(食堂)	テント設置練習 かな箸作り		レクリエーション (ディスクゴルフ・ グランドゴルフ・ キンボール・クック)		夕食(食堂)	入浴	登山安全確認	ふりかえり 健康観察	就寝	(本館)	交流の家	
3日目 8/15(月)		起床	健康観察 荷物整理	朝食(食堂)	赤城山チーム登山 ①新坂平駐車場～地藏岳～八丁峠～長七郎～小沼駐車場 ②大沼駐車場～地藏岳～八丁峠～長七郎～小沼駐車場 ※雨天のため覚満淵放棄			夕食(食堂)	入浴	チームMT③ 「明日何しようか？」	ふりかえり 健康観察	就寝	(本館)	交流の家						
4日目 8/16(火)		起床	健康観察 荷物整理	朝食(食堂)	グループタイム (テント設営)		昼食(食堂)	グループタイム (野外炊事)		入浴	登山MT 「どの山を登ろうか？」	ふりかえり 健康観察	就寝	(本館)	交流の家					
5日目 8/17(水)		起床	健康観察 荷物整理	グループタイム (朝食づくり)	テント片付		うどん打ち体験		チームMT④ 「お別れパーティーで何しようか？」 (レク・選択野外炊事)	夕食(食堂)	入浴	登山安全確認	ふりかえり 健康観察	就寝	(本館)	交流の家				
6日目 8/18(木)		起床	健康観察 荷物整理	朝食(食堂)	赤城山選択登山 ①新坂平駐車場～地藏岳～八丁峠～小沼駐車場～おとぎの森～小沼駐車場 ②大沼駐車場～黒檜山～駒ヶ岳～鳥居峠～小沼駐車場		夕食(食堂)	入浴	キャンプのまとめ 発表の仕方	ふりかえり 健康観察	就寝	(本館)	交流の家							
7日目 8/19(金)		起床	健康観察 荷物整理	朝食(食堂)	キャンプのまとめ・発表準備		昼食(食堂)	パーティー準備		眼の検査		お別れパーティー (選択野外炊事・レク)	ふりかえり 健康観察	就寝	(本館)	交流の家				
8日目 8/20(土)		起床	健康観察 荷物整理	朝食(食堂)	退所点検	ふりかえり アンケート記入	閉会式 リハ	解散												

●9月16日～9月17日 事後キャンプ

ステージ	4:00	5:00	6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	宿泊場所
1日目 9/16(土)						受付	アンケート	本キャンプを ふりかえろう (映像)	荷物整理 荷物移動	昼食(食堂)	チームMT⑤ 「これから何しようか？」 (各グループごとに遊ぶ)	眼の検査		長期自然体験キャンプ同窓会 ①野外炊事(カレーライス) ②たき火	入浴	ふりかえり 健康観察	就寝	(本館)	交流の家
2日目 9/17(日)		起床	健康観察 荷物整理	朝食(食堂)	退所点検		アドベンチャーラリー		昼食(食堂)	取組発表	ふりかえり アンケート記入	解散							

(2)プログラムデザイン

【ステージについて】

参加者にステージのねらいを意識させながら実施できるよう、全体を事前キャンプ「ファースト」、本キャンプ「セカンド」「サード」、事後キャンプ「ファイナル」の4つのステージに分けることで本事業のねらいを達成するための手立てとした。

日程	ステージ	ステージのねらい	活動のポイント	スタッフの関わり方
事前キャンプ1日目 7/8 (土)	【ファースト】 出会い	本キャンプに向けて、新しい仲間とともに協力して取り組んでいこうとする意欲をもつ。	<ul style="list-style-type: none"> 本キャンプに向けて、必要な心構えや道具の準備を自分なりに考える。 初めて出会う仲間と様々な活動に進んで取り組む。 	<ul style="list-style-type: none"> 子供たちの緊張をほぐすために、笑顔で接し、明るく元気に前向きな態度で接する。 基本的な生活習慣（早寝早起き朝ごはん）や挨拶、正しい言葉遣い、整理整頓などについて指導し、意識付けを行う。 個人の特徴（人との関わり方などの性格）をつかみ、記録を取る。
事前キャンプ2日目 7/9 (日)				
本キャンプ1日目 8/13 (日)	【セカンド】 獲得・グループ	グループメンバーの個性を知るとともに、キャンプに必要な基礎知識や技能を身に付け、合意形成を図りながら仲間と協働することができる。	<ul style="list-style-type: none"> 様々な活動を通して、自分の得意なこと（長所）や仲間の得意なことに気付く。 チームの仲間を助けたり、助けられたりすることで仲間のよさに気付く。 キャンプ生活に必要な様々な知識、技術を身に付ける。 チームの中での自分の役割を理解し、その役割を果たす。 	<ul style="list-style-type: none"> 個人とグループの特徴をつかみ、記録を取る。 野外炊事などのキャンプ生活に必要な基礎知識や技術を伝え、手本となる。 個々の緊張を和らげ、チーム内でお互いの関わりが生まれるようにする。 子供たちの挑戦を積極的に励まし、認め、一人一人の意欲を高める。 子供たちの人間関係について実態把握し、スタッフ間の連絡を密にして支援する。
本キャンプ2日目 8/14 (月)				
本キャンプ3日目 8/15 (火)				
本キャンプ4日目 8/16 (水)				
本キャンプ5日目 8/17 (木)	【サード】 成長	キャンプの中で、できるようになったこと・意識したことを整理し、言葉でまとめることで自身の成長を実感する。	<ul style="list-style-type: none"> 心身の状態を考え、自分に適した登山コースを選択する。 日々のふりかえりを活用し、自身の成長を実感する。 助けが必要な場面で適切に仲間を支援、互いに協力して活動に取り組む。 	<ul style="list-style-type: none"> 登山ルートでは、安全の確保は徹底するが、直接的な手助けは行わず、仲間同士での助け合いを見守る。 キャンプスタート時の頃の自分を想起させ、やり抜いたことに対する自信を持たせる。 子供たちの体力的な様子に目を配り、体調の変化の把握に努める。
本キャンプ6日目 8/18 (金)				
本キャンプ7日目 8/19 (土)				
本キャンプ8日目 8/20 (日)				
事後キャンプ1日目 9/16 (土)	【ファイナル】 旅立ち	全日程をやり遂げたという達成感を味わい、これまでの自分と今の自分の変化や成長を見つめ、今後の自分の生き方について考える。	<ul style="list-style-type: none"> チームの仲間と過ごした日々をふりかえり、自分の意見をもち発言すること、他者の意見を傾聴することの大切さを確かめる。 最後までやり抜いた自分を見つめ、成長を実感し、これからの生活に生かしているという気持ちをもつ。 	<ul style="list-style-type: none"> キャンプを通して学んだことを、今後の人生にどのように生かしていきたいか、しっかりと考えさせる機会を充実させる。 これからも、何事にも自信を持って取り組むよう言葉をかける。
事後キャンプ2日目 9/17 (日)				

●ステージのねらいを具現化するための主なプログラム

【ファースト】 出会い



アイスブレイク



野外炊事



登山安全確認

- 初めて出会う仲間との関係づくりの場を設ける。
- 本キャンプに向けての必要な心構えや道具の準備を考えさせる。

【セカンド】 獲得・グループ



アドベンチャーラリー



グループタイム（テント設営）



ふりかえり

- 仲間を助けたり、助けられたりすることで、仲間のよさに気付くことができるようにする。
- キャンプ生活に必要な様々な知識、技術を身に付けさせる。
- 活動を通して、自分の長所や仲間の長所に気付くことができるようにする。

【サード】 成長



グループタイム（朝食づくり）



チームミーティング



赤城山選択登山（地蔵岳）



赤城山選択登山（駒ヶ岳）



お別れパーティー



決意表明

- 適切に仲間を支援、互いに協力できる活動を設定する。
- 心身の状態を考えて、自分に適した登山コースを選択できるようにする。
- 日々のふりかえりから、自身の成長を実感し、言葉でまとめられるようにする。

【ファイナル】 旅立ち



野外炊事



ふりかえり



取組発表

- 自分の変化や成長を感じられる活動を設定する。
- 仲間と過ごした日々をふりかえる時間を設ける。
- 今後の自分の生き方について考え、伝え合う場を設定する。

(3)各キャンプの内容

ボランティア研修

1. 企画運営のポイント

- 運営側として参加するボランティアスタッフを対象にあかぎ無限大キャンプに向けて、野外炊事・登山についての基本的な知識や技能を身に付け、ボランティアとしての役割を理解し、心構えをもてるよう企画した。
- ボランティアが見通しと余裕をもって事前キャンプに臨めるように、事前キャンプの内容に沿った研修内容と事前キャンプ細案の読み合わせを行った。

2. 日程

日程	午前	午後	夜
7月1日(土)	集合 自己紹介・アイスブレイク 説明「事業概要説明」 講義「青少年教育施設におけるボランティアの役割」	演習「アドベンチャーラリー」 「テント設営の方法」	演習「野外炊事」
7月2日(日)	演習「つどい・退所点検の仕方」 実技「赤城山登山」 (覚満淵～鳥居峠～長七郎～小沼)	説明「事前キャンプ細案読み合わせ」	

3. 主な活動内容



テント設営の方法



野外炊事



赤城山登山

4. 成果と課題

- 参加者（ボランティアスタッフ）アンケート結果
満足：6人（100%） やや満足：0人（0%） やや不満：0人（0%） 不満：0人（0%）
- 成果
 - 実技に関する研修を通し、「予測されるけがや事故をイメージできた。」との感想が多いことから、有効であったと考えられる。
 - 登山を通しボランティア自身の体力把握ができ、子供たちとの登山についても見通しをもたせることができた。
- 課題
 - 子供への接し方については漠然とした不安を抱えるボランティアが複数見られたので、講義などを通し、少しでも解消できるような配慮が必要である。
 - 本キャンプで実施予定のプログラム数を考えると、1泊2日の研修ですべてを網羅することは難しい。プログラムの危険度やけがのリスク等を考慮し、ボランティア研修で実施するプログラムの精選が重要である。

①事前キャンプ 【ファースト】

1. 企画運営のポイント

- 本キャンプに向けて、心身の準備を自分なりに整えられるように本キャンプで実施する日程・プログラムを中心に計画した。特に登山・野外炊事について安全確認を行い、基本的な知識・技能の習得ができるよう実施した。
- プログラムごとにチームを編成することでより多くの参加者同士が交流できるよう配慮した。また、チームリーダーであるボランティアも活動ごとに変え、多くの参加者の実態把握ができるよう配慮した。
- アイスブレイクでは、ボランティア主体のアイスブレイクを中心に実施し、ボランティアが参加者の実態を把握できるよう配慮した。

2. 日程

日程	午前	午後	夜
7月8日(土)	開会式 自己紹介・アイスブレイク	レクリエーション 眼の検査	野外炊事 ふりかえり
7月9日(日)	朝のつどい 登山(覚満淵～長七郎～小沼)	ふりかえり アンケート 解散	

3. 活動の様子



アイスブレイク



野外炊事



登山(長七郎山)

4. 成果と課題

- 参加者アンケート結果
満足：21人（88%） やや満足：3人（12%） やや不満：0人（0%） 不満：0人（0%）
- 成果
 - ボランティアが中心となって実施したアイスブレイクでは、「楽しくて初めて会った人ともすぐ仲良くなった。」との感想が多く、スムーズな仲間づくりにつながった。
 - 活動ごとにグループを編成したことで、ボランティアが参加者の実態把握ができ、参加者同士が交流を深めることにつながった。
 - プログラムに関する回答では、野外炊事に関する技能や登山の体力配分に関する記述が多く、キャンプにおける技能の習得につながった。
 - 本キャンプに向け、自己の体力や野外炊事での改善点など課題を見つけ、本キャンプに生かしたいという前向きな感想が多く、本キャンプに向けての期待が高まった。
- 課題
 - 感染症対策はもちろんのこと、暑さへの対策が必須である。本キャンプではゆとりあるプログラム編成やボランティアとの連携を十分に図り、熱中症予防に努める必要がある。
 - 施設利用の仕方については、日程の都合上全体のオリエンテーションが行えなかった。プログラムを見直し、必要最低限の施設の使い方については説明が必要である。
 - 眼科検診時の活動（レクリエーション等）はグループごとで行えるものなどに再考する。

②本キャンプ

【セカンド】【サード】

1. 企画運営のポイント

- (1) 本キャンプの日程を「セカンド【獲得・グループ】」「サード【成長】」と2つのステージに分け、参加者にステージのねらいを意識させながら実施した。
- (2) 「セカンド【獲得・グループ】」ステージでは、グループで活発に協議・活動するグループタイムを設定することにより、お互いを認め合う活動を実施した。
- (3) 「サード【成長】」ステージでは、個人で登山のコースを選択する赤城山選択登山を設定することにより、個人の成長を実感できるような活動を実施した。

2. 日程

日程	午前	午後	夜
8月13日(日)	・開会式 ・アイスブレイク	・チームミーティング① 「どんなチーム旗を作ろうか？」 ・眼の検査 ・野外炊事	・チームミーティング① 「どんなチーム旗を作ろうか？」 ・ふりかえり
8月14日(月)	・オリエンテーリング	・テント設営練習 ・かなな著作	・登山安全確認 ・ふりかえり
8月15日(火)	・赤城山チーム登山 (悪天候のため覚満淵散策)	・チームミーティング② 「明日何しようか？」	・ふりかえり
8月16日(水)	・グループタイム ・テント設営	・グループタイム	・登山ミーティング ・ふりかえり
8月17日(木)	・グループタイム ・うどん打ち体験	・チームミーティング③ 「お別れパーティーで何しようか？」	・登山安全確認 ・ふりかえり
8月18日(金)	・赤城山選択登山	・赤城山選択登山	・ふりかえり
8月19日(土)	・キャンプのまとめ ・発表準備	・眼の検査 ・パーティー準備 ・お別れパーティー	・ふりかえり
8月20日(日)	・ふりかえり ・閉会式		

3. 活動の様子



野外炊事



オリエンテーリング



テント設営練習



チームミーティング



グループタイム



うどん打ち体験



赤城山選択登山



お別れパーティー



決意表明

4. 成果と課題

(1) 参加者アンケート結果

満足：21人(88%) やや満足：3人(12%) やや不満：0人(0%) 不満：0人(0%)

(2) 成果

- ・ステージごとのねらいにせまるプログラム編成を行ったことで、参加者がねらいを意識しながらプログラムに参加することができた。
- ・参加者アンケートで、「グループで分かり合えるまで話し合うことができた。」「みんなで協力する活動で友情を感じることができた。」等の感想から、グループでの話合いやグループタイムを設定したことでグループ内での多様な考えにふれ、互いに認め合うことにつながった。
- ・1か月後の保護者アンケートより、「進んで家事に取り組むようになった。」「学校生活で自ら立候補する姿が見られた。」等の感想が見られた。本事業の経験が参加者の主体的・自発的な行動につながった。
- ・事前にボランティアと安全対策について十分な共通理解を図り、活動を実施することで熱中症の予防、感染症の予防につながった。
- ・毎日のふりかえりの時間は、ボランティアが中心となって行った。事前にふりかえりの仕方について共通理解をもって行ったことで、毎日のふりかえりがより充実したものとなった。

(3) 課題

- ・グループでの話合いがより意味のあるものとするための課題解決的なプログラムの設定や提示が必要となる。
- ・参加者自身の成長を具体的に感じることでできるプログラム、場の設定の工夫が必要である。
- ・今回の事業では、各班にボランティアをグループリーダーとして1名配置し、本部付きの全体ボランティアを2名配置した。グループ内でリーダーとしての役割を明確にすることはできたが、場面によっては人手不足を感じる場面もあった。ボランティアの数の検討やボランティアの役割をローテーションするような仕組みを考える必要がある。



③事後キャンプ

【ファイナル】

1. 企画運営のポイント

- (1) 取組発表を行うことで、本キャンプ後の自身の成長や変化について参加者が把握できるよう配慮した。
- (2) 既習のキャンプにおける技能を発揮する場として野外炊事を設定することにより、自身の成長を実感できるよう企画した。

2. 日程

日程	午前	午後	
9月16日(土)	受付 開会式 本キャンプのふりかえり	チームミーティング④ 「これから何して遊ぼうか？」 選択レクリエーション 眼の検査	野外炊事 たき火 ふりかえり
9月17日(日)	朝のつどい アドベンチャーラリー 取組発表準備	取組発表 ふりかえり アンケート 閉会式 解散	

3. 活動の様子



たき火



アドベンチャーラリー



取組発表

4. 成果と課題

(1) 参加者アンケート結果

満足：21人(95.5%) やや満足：1人(4.5%) やや不満：0人(0%) 不満：0人(0%)

(2) 成果

- 取組発表を行うことで、本キャンプの決意表明後、学校生活や家庭生活でどのようなことをがんばっているか、自身をふりかえる機会となった。
- 本キャンプで実施できなかったプログラムを実施することができ、参加者の満足度も高かった。
- 野外炊事では、参加者からも「今までで一番おいしいカレーをつくることができた。」「野菜がうまく切れた。」など、既習の技能を生かして調理することができたという感想が多いことから、身に付けた技能を発揮する場として効果的だった。

(3) 課題

- 参加者が自身の成長や変容がわかるプログラムの開発や掲示物の工夫が必要である。
- キャンプ参加前を含む、参加者の健康状態を十分に把握する必要がある。

(4)安全対策

①熱中症対策

- ゆとりあるプログラム編成を行い、プログラムの間に十分な休憩時間を取り入れた。
- 参加費で熱中症対策グッズ（首元冷却スカーフ）を購入し、個人に配布した。屋外での活動時は積極的に着用するよう促した。
- WBGT 測定をこまめに行い、「警戒」「厳重警戒」を示している際には、プログラムの変更を行った。
- 屋外での活動時は、活動場所付近に緊急の避難所として空調のきいた部屋を1室確保した。
- グループリーダーであるボランティアは塩分タブレットや経口補水液を常備し、適宜参加者に渡した。また、グループごとの活動時は参加者の様子を観察し、十分な休憩をとった。

②登山時の安全対策

- 登山コースを設定するにあたり、候補となった全コースの実地踏査を行い、参加者に適したコースを設定した。
- 実地踏査では、危険箇所の確認、雨天時の対応、エスケープルートの設定などをスタッフで確認し、記録した。
- ボランティア研修では、講義で登山の安全管理研修を実施した。また、実際に参加者が登る山で安全確認や実技研修を実施した。
- 登山実施前に登山ミーティングを行い、参加者とスタッフ全員でコースや危険箇所を確認した。
- 登山時は担当するスタッフ数を増員し、緊急車両の配備、連絡手段の確保など緊急時は迅速な対応が取れるようスタッフ配置を行った。

③感染症対策

- 新型コロナウイルスが感染症法上の位置付けが5類に移行したが、基本的な感染症対策は継続して実施した。
- 宿泊する部屋は、定員より少ない人数を配置した。
- テント泊においては、一人用のテントを使用し、感染症対策を実施した。
- 野外炊事においては、手洗い、アルコール消毒を徹底させるとともに、調理中はマスクの着用、ビニール手袋の着用を推奨した。
- 参加者とボランティアがこまめに手指消毒できるように、アルコールスプレーやアルコール除菌シートを常時使えるよう配置した。

(1) 当所実施のふりかえりシートからみる参加者の変容

1. ふりかえりシートについて

【ファースト】 出会い
ねらい：本キャンプに向けて、新しい仲間とともに協力して活動に取り組もう。

<p>○7月8日の主な活動 ・アイスブレイク ・レクリエーション ・野外炊事（カレーライス）</p> <p>○今日の活動をふりかえって ①自分の意見をしっかりと言えた (5・4・3・2・1) ②友達の意見に耳を傾けることができた (5・4・3・2・1) ③自分と友達の考えの違いに気づいた (5・4・3・2・1) ④みんなが納得する決定ができた (5・4・3・2・1) ⑤グループの決定に満足している (5・4・3・2・1) ⑥決まったことに対してやる気ができた (5・4・3・2・1)</p> <p>○明日の活動で生かしたいこと 家庭生活や学校生活で生かしたいと思ったこと</p>	<p>○7月9日の主な活動 ・赤城山登山 （真高洞～黒岩峠～長七郎山～小沼）</p> <p>○今日の活動をふりかえって ①自分の意見をしっかりと言えた (5・4・3・2・1) ②友達の意見に耳を傾けることができた (5・4・3・2・1) ③自分と友達の考えの違いに気づいた (5・4・3・2・1) ④みんなが納得する決定ができた (5・4・3・2・1) ⑤グループの決定に満足している (5・4・3・2・1) ⑥決まったことに対してやる気ができた (5・4・3・2・1)</p> <p>○明日の活動で生かしたいこと 家庭生活や学校生活で生かしたいと思ったこと</p>
---	---

ふりかえりの項目について

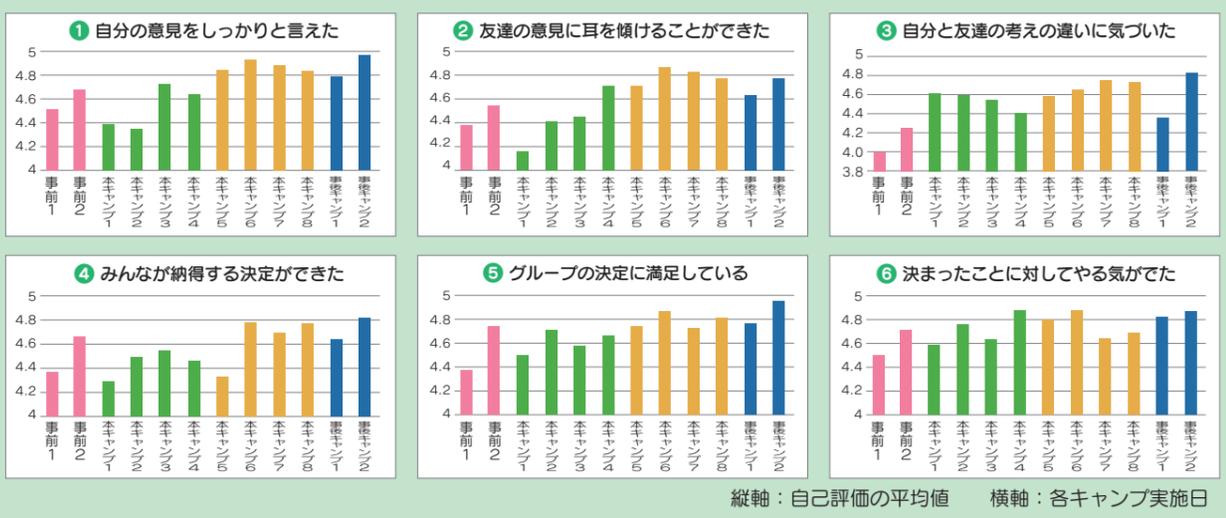
- ①自分の意見をしっかりと言えた
- ②友達の意見に耳を傾けることができた
- ③自分と友達の考えの違いに気づいた
- ④みんなが納得する決定ができた
- ⑤グループの決定に満足している
- ⑥決まったことに対してやる気ができた

※ステージごとの協働的な自然体験プログラムについては、P.04 参照

本事業では、キャンプをファースト（出会い）セカンド（獲得・グループ）サード（成長）ファイナル（旅立ち）の4つのステージに分けて実施し、毎日、ふりかえりの時間を設定した。ステージごとに上記のふりかえりシートを活用し、グループでのふりかえりを行った後、個人でのふりかえりを行った。

※1～5段階の自己評価で、最大値は5

2. 参加者全体の変容



考察

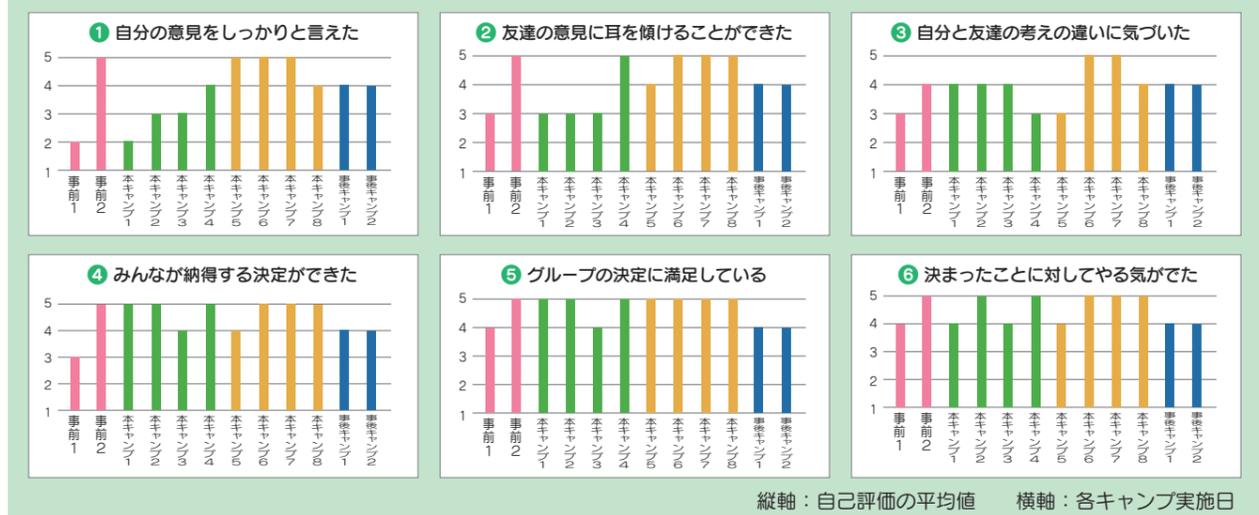
- ・ふりかえりシートの結果から、項目①②において数値の向上が見られる。チームミーティングなどのグループでの話し合い時間を確保し、継続したことが効果的だったことがわかる。
- ・ふりかえりシートの項目③④⑤の数値の向上が見られることから、協働的な自然体験プログラムは、多様性を認め合える意識を醸成する上で効果があることがわかる。
- ・複数の項目で本キャンプ1日目、事後キャンプ1日目の数値が低くなっている。本キャンプ、事後キャンプの始まりの日であり、十分なコミュニケーションをとることができなかったことが要因だと推察される。

3. 変容の事例

対象児A（小学生・男子）

A児は、事前の保護者アンケートで「人見知りなので心配」と記載があった児童である。A児自身は事前アンケートに「初めて出会う人いろいろなレクリエーションを楽しみたい。」と記入しており、本キャンプを通して人と関わり、成長したいという思いが感じられた。ファーストステージのふりかえりでは、人との関わりについて自分のできなかったことを反省する記述が多かったが、ステージが進むにつれ、「自分の意見を言う」「友達の意見に耳を傾ける」といった項目で肯定的な回答が見られるようになった。それに伴い、「自分と友達の考えの違いに気づいた。」「みんなが納得する決定ができた。」の項目で肯定的な回答も増えていった。

ア 自己評価



イ 自由記述(家庭生活や学校生活で生かしたいこと)

事前キャンプ	1日目	自分の意見を言えなかったから自分の意見をしっかりと言いたい。友達の意見も聞きたい。
	2日目	今日は昨日より意見を言ったり友達の意見を聞いたりできた。考えの違いにも気づきたい。
本キャンプ	1日目	意見を言って、違う意見も聞いて、自分と友達の考えの違いに気づきたい。
	3日目	自分の意見をもう少し言い、友達の意見もしっかり聞きたかった。
	4日目	今日は、テント設営や野外炊事の時、意見を言えたり友達の意見も聞いた。
事後キャンプ	7日目	今日の決意発表で間違えないようにできた。
	1日目	仲間と協力すると成果が大きいと分かったから、学校でも協力していきたい。
	2日目	取組み発表で言ったことを学校生活でも生かしたい。

ウ 1か月後（保護者アンケート）

- ・周りの友達と仲良く関わっている。お手伝いも進んでするようになった。

考察

- ・項目①②は日が経過するごとに数値の向上が見られたことから、グループ内の話し合いで進んで発言したり友達の意見を聞いたりすることができるようになったことがうかがえる。
- ・項目③は、①②の数値が向上してきたことで、大きく向上するようになった。自分の意見を伝え、友達の意見を聞くことで、意見の違いに気づくことができるようになったと考えられる。
- ・項目④⑤⑥においては、比較的高い水準で推移していることからグループへの所属意識が高いことがうかがえる。
- ・自由記述では、キャンプ当初は自分の考えを伝え、相手の意見を聞くことに対して、「〇〇したい」という記述が多かった。キャンプが進むにつれ、話し合いに対して「〇〇できた」という言葉を使うようになり、プログラムを通し他者と話し合い、考える場面を多く経験できた結果と推察される。
- ・保護者アンケートの結果からは、キャンプ後も他者と良好な関係をつくることができていると推察できる。

(2)あかぎ無限大キャンプにおける社会的能力の変容(2年目)

國學院大學人間開発学部 准教授 青木 康太郎

1.はじめに

本研究では、あかぎ無限大キャンプで目指す子供像を踏まえ、昨年度に引き続き参加者の社会的能力の変容に着目し、教育効果を検証することとした。

社会的能力の測定は、田中芳幸ら(2011)が開発した「小学生版「社会性と情動」尺度」のうち、基礎的な社会的能力(以下、「社会的能力」という)である「自己のコントロール」「対人関係」「責任のある意思決定」「自己への気づき」「他者への気づき」を用いて、キャンプの事前、事後、1か月後に調査を実施した。また、無限大キャンプにおける体験(以下、「組織キャンプ体験」という)が参加者の社会的能力の変容に及ぼす影響を明らかにするため、西田順一ら(2002)が開発した「児童用組織キャンプ体験評価尺度」のうち、「挑戦・達成体験」「他者協力体験」「自己開示体験」「自己注目体験」を用いて事後調査を行い、それぞれの組織キャンプ体験の程度による社会的能力の教育効果の違いについて検証することとした。

分析に当たっては、社会的能力や組織キャンプ体験の回答を因子ごとに得点化し、各因子の平均(M)と標準偏差(SD)を算出した。次に、社会的能力の教育効果を検証するため、測定時期を要因とした一要因分散分析を行い、併せて、測定時期間の効果量(cohen's d)を算出し、教育効果の大きさを確認した。また、組織キャンプ体験の程度による社会的能力の教育効果の違いを検証するため、組織キャンプ体験の回答をもとに参加者を多群と少群に分け、群ごとに各測定時期間の社会的能力の効果量を確認した。

2.分析結果

(1)社会的能力の変容

社会的能力の得点の推移は図1のとおりである。分析の結果、測定時期の主効果に有意差が認められたのは「自己のコントロール」($F(2, 42) = 3.86$ $p < .05$ $\eta^2 = .155$)のみであった。多重比較を行ったところ、キャンプの事後と1か月後の間に有意な差が認められた。続いて、各測定時期間の効果量をみたところ、小程度以上の効果量が認められたのは「自己のコントロール」のみで、キャンプの事前-事後に中程度、事前-1か月後と事後-1か月後に大きな効果量が認められた。

以上のことより、キャンプで変容がみられたのは「自己のコントロール」のみで、キャンプの事前から事後にかけて得点が低下し、その後の1か月後にかけて向上していることが分かった。



図1. 基本的な社会的能力の変容

(2)組織キャンプ体験の程度による社会的能力の教育効果の違い

変容がみられた「自己のコントロール」に着目し、組織キャンプ体験の程度による教育効果の違いを検証した。その結果、いずれの組織キャンプ体験においても、低群はキャンプの事前から事後にかけて得点が低下し、「他者協力体験」では中程度の効果量が認められた。一方、高群はキャンプの事前-事後では効果量が認められなかったものの、事前-1か月後と事後-1か月後において「挑戦・達成体験」「自己開示体験」「自己注目体験」に小程度から中程度の効果量が認められた。

つまり、事前から事後にかけて「自己のコントロール」の得点の低下は、組織キャンプ体験の少なかった参加者による影響が大きかった可能性あることが示唆され、中でも「他者協力体験」は他の体験よりも影響が大きかったことが分かった。一方、組織キャンプ体験が多かった参加者はキャンプの1か月後に得点の向上がみられ、特に「挑戦・達成体験」は他の体験より効果が大きいことが示唆された。

表1 組織キャンプ体験の程度による「自己のコントロール」の向上効果の違い

変数	群	N		事前	事後	1か月後	効果量(d)								
							事前-事後		事後-1か月後		事前-1か月後				
挑戦・達成体験	高群	11	M	3.51	3.55	3.79	0.06			0.52	中	↗	0.64	中	↗
			SD	0.46	0.52	0.40									
他者協力体験	低群	11	M	2.94	2.73	2.94	0.40	小	↘	0.37	小	↗	0.00		
			SD	0.57	0.47	0.65									
自己開示体験	高群	11	M	3.15	3.21	3.30	0.08			0.11			0.19		
			SD	0.74	0.76	0.84									
自己注目体験	低群	11	M	3.30	3.06	3.42	0.52	中	↘	0.71	中	↗	0.26	小	↗
			SD	0.41	0.51	0.52									
自己開示体験	高群	13	M	3.21	3.18	3.46	0.04			0.39	小	↗	0.37	小	↗
			SD	0.63	0.69	0.76									
自己注目体験	低群	9	M	3.26	3.07	3.22	0.32	小	↘	0.26	小	↗	0.06		
			SD	0.55	0.60	0.55									
自己注目体験	高群	12	M	3.33	3.33	3.50	0.00			0.31	小	↗	0.31	小	↗
			SD	0.55	0.55	0.54									
自己注目体験	低群	10	M	3.10	2.90	3.20	0.30	小	↘	0.40	小	↗	0.14		
			SD	0.63	0.68	0.82									

3.まとめ

本研究の結果、社会的能力のうち、「自己のコントロール」に有意な変容が認められ、組織キャンプ体験を多くした参加者は「自己のコントロール」が1か月後に向上する可能性が示唆された。

キャンプの教育効果は、通常、事前から事後にかけて向上するものだが、本研究では1か月後にその効果が認められた。これは様々な要因が考えられ、一概に言えないところはあるが、一つの可能性として、挑戦・達成体験をはじめ、キャンプで様々な体験を重ねることで自分をコントロールする力が徐々に身についていき、キャンプ直後は実感できなかったものの、日常生活に戻り、学校や家庭で過ごす中で「いやなことがあっても、がまんしてうまくやっていける」という実感を得る機会が多かったのではないかと推察される。

また、1か月後の調査で、キャンプで学んだことを生かしてやってみたことについて尋ねたところ、半数の参加者から「チームミーティングで意見を譲り合うことを学んで、実際に学校でも意見を譲り合えた。」「意見を言うこと。そして相手の意見に耳を傾けること。」「友達をほめた。」といった回答が得られた。このことから、あかぎ無限大キャンプで目指した「自分の意見を発言でき、他者の意見を傾聴できる」「自分のよいところと他者のよいところに気付く」といった姿がはぐくまれ、日常生活の中でうまく発揮されているのではないかと推察される。

本研究では、「自己のコントロール」以外の社会的能力には有意な変容がみられず、さらに「他者協力体験」が少なかった参加者は「自己のコントロール」が低下していたことが分かった。今後、本キャンプで社会的能力の向上を図るためには、グループで話し合ったり、協力して難しい課題に取り組むような活動の機会を増やしていくなどの工夫が必要になるのではないかと考える。

(3) 慶應義塾大学医学部・国立赤城青少年交流の家・株式会社坪田ラボ・近視予防フォーラムとの共同研究

慶應義塾大学医学部 眼科学教室 特任助教 小川 護

【研究課題】

屋外活動の眼への影響の調査

【研究の目的】

約1週間の屋外活動前後で屈折値・眼のバイオメトリーデータ・ドライアイ・アレルギー性結膜炎などを評価・比較することが本研究の目的である。

【研究の概要】

国立青少年教育振興機構から慶應義塾大学医学部眼科学教室・株式会社坪田ラボに対して屋外活動と眼に関する調査依頼があり、国立赤城青少年交流の家にて毎年実施されている子供を対象とした屋外活動中心のプログラムにおいて共同研究を実施することとなった。検査測定では屈折値（近視や遠視の程度）や、眼軸長（目の長さ）など眼のバイオメトリーデータを測定し、近視などに関連すると考えられている環境因子についても質問票で評価している。初年度は、令和3年度の国立赤城青少年交流の家の事業計画としての限界突破キャンプ参加者である17名を対象に、キャンプ前後で上記内容の探索的研究を行い比較した。令和4年度はあかぎ無限大キャンプとして24名が参加し、近視予防フォーラムが共同研究に加わった。プログラムの効果を評価する目的でプログラム約1か月前に行われる事前キャンプ及び約1か月後に行われる事後キャンプでも参加者に同様の測定を行った。しかし新型コロナウイルスの影響もあり本キャンプ施行直後は測定が中止となった。令和5年度は同様に24名が参加し当初計画通り4回（事前、本キャンプ前後、事後）を行った。

【検査日時】 国立赤城青少年交流の家にて計4回

国立赤城青少年交流の家

- | | |
|---------------------------|--------------------------------|
| 1. 7月8日(土) 13:30 - 15:00 | 事前キャンプ: 7月8日(土) ~ 9日(日) 1泊2日 |
| 2. 8月13日(日) 13:30 - 15:00 | 本キャンプ: 8月13日(日) ~ 20日(土) 7泊8日 |
| 3. 8月19日(土) 13:30 - 15:00 | |
| 4. 9月16日(土) 13:30 - 15:00 | 事後キャンプ: 9月16日(土) ~ 17日(日) 1泊2日 |

検査者: 慶應義塾大学病院眼科視能訓練士3名、眼科医1名

【検査内容】

近視の状態と近視関連因子（ドライアイ・アレルギー性結膜炎など）の変化

- 1) 主要評価項目
検査機器を用いた眼球パラメーター（屈折値、収差、瞳孔径、眼軸長、水晶体厚、脈絡膜厚など）の変化量（1週間のプログラム参加前後での比較）
- 2) 副次的評価項目
ドライアイ（シルマーテスト及びストリップメニスコメトリー）、アレルギー性結膜炎の変化（質問表）
- 3) 探索的評価項目
近業の際の眼から対象物までの距離、屋外活動時間、近業時間、睡眠時間、両親の近視、眼鏡装用者の眼鏡の種類などのアンケート項目（質問表）

機器を使う検査



1. IOL master 1-2分
眼軸長=眼の長さ
2. iTrace 1-2分
屈折値=近視や乱視の程度
3. OCT 2-3分
脈絡膜厚=眼の周りの厚み

試薬を使う検査



4. ストリップメニスコメトリー
涙の貯留量 15秒
5. シルマーテスト
涙の分泌量 5分

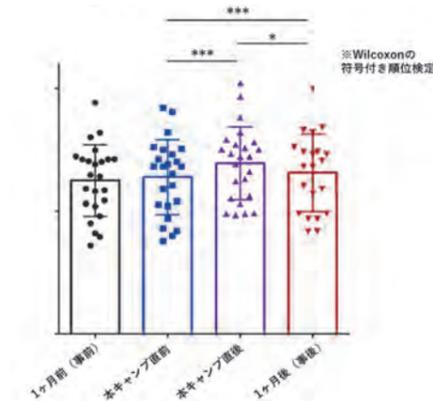
【参加者】

2023年度は24名（男子12名、女子12名）のうち小学5年生11人、6年生13人

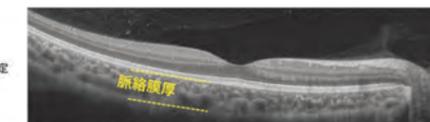
【結果】

1週間の集中的な屋外活動は児童の脈絡膜を厚くしたことが昨年までの結果より示された。脈絡膜厚と近視には関連性が認められており、近視が強いと脈絡膜厚が薄く、近視が弱いと脈絡膜厚が厚いことが報告されている。キャンプに参加することで脈絡膜厚が有意に厚くなったことは、1週間という短期間で近視の進行を抑制する効果が表れていることが示唆されている。集中的な屋外活動の長期的な効果を検証することが重要であるため、2022年度はキャンプ前後約1か月後に行われる事前・事後キャンプでの測定を行った。興味深いことに、1か月後においても脈絡膜厚の増加は維持されており、キャンプの効果が持続されている可能性が考えられた。本年度は昨年施行できなかった本キャンプ直後の測定を行い、解析を行ったところキャンプ前に比べ脈絡膜厚が増加することが確認され、1か月後は減少したもののキャンプ前よりは脈絡膜厚が増加していた。

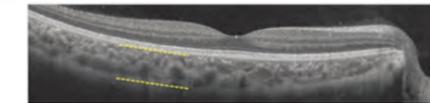
キャンプ前後での脈絡膜厚



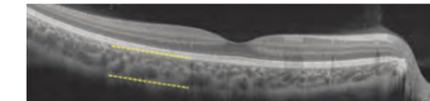
本キャンプ直前



本キャンプ直後



1ヶ月後(事後)



検査風景



【展望】

屋外活動の眼に対するポジティブな影響が明らかになりつつあるが、脈絡膜厚がほぼ変化しなかった者も認められたため、生活習慣などが影響するのかを探索していきたい。今後は参加者を増やし大規模及び全国的な調査も期待される。キャンプ直後の脈絡膜増加は効果が約1か月後も続くものの直後のほうが高く、定期的な屋外活動が重要かもしれない。今後、屋外活動の中でも大事な行動や効果持続期間のさらなる精査が望まれる。

(1) 成果

○参加者満足度

アンケートも含めて、全体的に満足度が高いという評価が多かった。

【事前キャンプ】 満足：21人(88%) やや満足：3人(12%) やや不満：0人(0%) 不満：0人(0%)

【本キャンプ】 満足：21人(88%) やや満足：3人(12%) やや不満：0人(0%) 不満：0人(0%)

【事後キャンプ】 満足：21人(95.5%) やや満足：1人(4.5%) やや不満：0人(0%) 不満：0人(0%)

○参加者アンケート・保護者アンケートや参加者実態から見る成果

- ①参加者アンケートで、「グループで分かり合えるまで話し合うことができた。」「みんなで協力する活動で友情を感じる事ができた。」等の感想から、グループでの話し合いやグループタイムを設定したことで、グループ内での多様な考えにふれ、互いに認め合うことにつながった。
- ②本キャンプの1か月後の保護者アンケートより、「進んで家事に取り組むようになった。」「学校生活で自ら立候補する姿が見られた。」等の感想が見られた。本事業の経験が参加者の主体的・自発的な行動につながった。
- ③事後キャンプでは、本キャンプで天候の関係により実施できなかったプログラムを実施したことで参加者の満足度も高まった。また、野外炊事では、「今までで一番おいしいカレーをつくる事ができた。」「野菜がうまく切れた。」などの感想が見られたことから、既習の技能を生かす場面を設定する場としても効果的だった。
- ④事後キャンプでは、本キャンプの決意表明後、学校生活や家庭生活で取り組んでいることを発表した。このことは、参加者のふりかえりと、これからの生活に生かしていこうとする意欲につながった。

○本キャンプの趣旨に対する成果

(1) 長期自然体験活動において、協働的な体験プログラム（野外炊事、赤城山登山、レクリエーション等）を通して、多様性を認め合える意識の醸成を図る。

- ①ステージごとのねらいにせまるプログラム編成を行ったことで、参加者がねらいを意識しながらプログラムに参加することができた。
- ②「サード」ステージで実施したグループタイムでは、参加者は活動内容や野外炊事のメニューを決めるという目標に向けて意欲的に話し合い、グループの友達と合意形成を図りながらお互いが納得のいく形へと導く姿が見られた。
- ③事前にボランティア研修キャンプを実施し、ボランティア一人一人が「ふりかえりの仕方」についての共通理解をもってキャンプに臨んだことにより、ボランティアが中心となって関わる「毎日のふりかえり」がより充実したものとなった。
- ④今年度は、天候によるプログラムの変更はあったが、キャンプ全日程を計画通り実施することができた。「ファースト」ステージの「出会い」から、「セカンド」ステージの「獲得・グループ」、「サード」ステージの「成長」と、キャンプ全体を通しての参加者の変容を直接見取ることができた。また、「ファイナル」ステージの「旅立ち」では、成長した参加者の姿を見ることができた。

(2) 課題

○プログラムについて

- ①グループでの話し合いがより意味のあるものとするため、レクリエーションの内容検討や野外炊事で作る料理の手順、役割分担などをチームミーティングで話し合うなど、課題解決的なプログラムの設定が必要である。
- ②参加者がキャンプを通し、自身の成長や変容を実感できる掲示物の工夫を行うことも必要だと考えられる。ベースとなる研修室にふりかえりシートの掲示は行ったが、参加者が一目で自身の成長を把握できるように工夫する必要がある。
- ③事後キャンプを行う上で、事前キャンプと事後キャンプに同一のプログラムを設定するなど、参加者自身が成長を感じられるという事後キャンプの趣旨に迫るような活動内容や場の設定が必要である。
- ④「多様性を認め合える意識の醸成」という本キャンプの趣旨から、多様性を認め合うことにつながるプログラムとその効果をより一層検討し、精選しながら取り入れていくことが必要である。

○参加者の安全確保・健康維持について

- ①熱中症対策
 - ・日中の活動時における熱中症対策に重点を置いた休憩の取り方について職員、ボランティアともに十分に確認しながら対応していく必要がある。そのためにも、空調のきいた部屋を確保し、休憩時間を意識して設けるなどの対策が必要になる。
 - ・夜間における屋外のテント泊中の熱中症対策として、テント設営する時間や就寝時間の配慮と熱中症対策のグッズなどの用意をする必要がある。
 - ・感染症予防対策を踏まえながら、屋外での活動時は人と十分な距離が取れる場合はマスクを外すよう推奨するとともに、ゆとりあるプログラム編成を意識する必要がある。
- ②感染症対策
 - ・野外炊事ではビニール手袋を設置し、参加者が調理の際、着用できるようにしておく必要がある。
- ③人員配置
 - ・登山プログラム時には、グループごとに緊急時に適切な対応が取れるような職員の増員と配置の工夫が必要となる。
 - ・今回の事業では、ボランティアが6名の参加だったが、プログラムによっては人手不足になる場面もあった。プログラムの構成も考慮し、ボランティアの募集人数を考える必要がある。



(3) 推進委員より(五十音順)

日常で発揮されるあかぎ無限大キャンプの教育効果

國學院大學人間開発学部 准教授 青木 康太郎 氏

昨年に続き、あかぎ無限大キャンプの教育効果の調査研究を担当させていただきました。また、今年も3日間、キャンプにも参加させていただき、子供たちと一緒に野外炊事やテント設営、レクリエーションなどを楽しみました。

3日目の赤城山チーム登山は、荒天のため、残念ながら小沼周辺のトレッキングとなってしまいましたが、徐々に施設から出て活動する子供たちはとても楽しそうな様子だったのが印象的でした。今年は、メインプログラムである赤城山選択登山を無事実施できたとのことで、参加者にとっては一生の思い出に残る素敵な体験がたくさんできたのではないかと思います。

キャンプの教育効果をみると、キャンプで体験を多くしたと感じている参加者は自分をコントロールする力が身に付いている可能性が示唆されました。また、キャンプでの様々な体験を通じて、「自分の意見を発言でき、他者の意見を傾聴できる」「自分のよいところと他者のよいところに気付ける」といった姿がはぐくまれ、日常生活の中でうまく発揮されていることもうかがえました。

あかぎ無限大キャンプに参加した子供たちが、この経験を糧に、これから人生で大いに活躍してくれることを期待しています。

(4) スタッフより

無限大の可能性

国立赤城青少年交流の家 企画指導専門職 中山 太平

「あかぎ無限大キャンプ」は今年で2年目を迎えました。今年度は、関係各所、保護者の協力もあり、全日程を予定通り実施することができました。キャンプ初日には緊張していた参加者も最終日には全日程をやり遂げ、一人一人が充実した表情をしていました。初めて取り組む活動にもグループの仲間と助け合い支え合い乗り越える姿が見られました。人や物に直接触れる体験活動の機会の減少している現代社会において、長期自然体験活動、協働的な自然体験活動プログラムは参加者にとってかけがえのない貴重な時間になったことと思います。そしてこの「あかぎ無限大キャンプ」を通して参加者一人一人が成長する姿が見られ、参加者全員に無限大の可能性を感じることができました。このキャンプで学び経験したことを今後の学校生活でも生かし、活躍してくれることを願っています。

個性を伸ばすあかぎ無限大キャンプ

慶應義塾大学医学部 眼科学教室 特任助教 小川 護 氏

国立赤城青少年交流の家における眼科検診が3回目となる、本年度もキャンプ中に目の測定を行わせていただきました。昨年度は新型コロナウイルスの影響もあり本キャンプが短縮され直後の測定が中止となりましたが、今年は全4回無事に終えることができました。簡単ではない検査もある中で、短時間の中で手順を理解しご協力くださり、円滑に進めることができご協力を誠に感謝申し上げます。また、回数を重ねるごとに要領よく協力的に行動することで成長を感じたのはもちろんのこと、本年度はしっかりと自分の意見を検査者に伝えてくれたのが印象的でした。研究や医療も相手との双方向の意思疎通が最も重要です。キャンプを通じて、一人ひとりの心が独立し他人を尊重できる多様性を培われたことと存じます。

事前・事後キャンプも含めた多彩な経験が本プログラムの魅力だと思います。昨年は私も家族で長七郎山に登頂し、赤城山の豊かな自然の中で過ごす素晴らしさを実感いたしました。また我々が重要と考えているバイオレットライト(太陽光に含まれる紫色の成分)測定を行ったところ、山中や山頂では興味深い変化が認められました。少しずつではありますが、外でよく遊ぶことが、なぜ身体によいのか分かってきております。この国立赤城青少年交流の家における研究が深まっていき全国的な調査研究に広がることを期待いたします。近視児童の増加は世界的な社会問題になっており、新型コロナウイルス蔓延による在宅時間やスマートフォンなどデジタルデバイス使用時間の増加が近視進行に影響しています。キャンプを通じた屋外活動の目や体への効果を科学的に検証し、子供たちの身体発育・健康増進の手助けになれるよう頑張っています。

後援：群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、埼玉県教育委員会、栃木県教育委員会、茨城県教育委員会
共同研究：慶應義塾大学医学部眼科学教室、株式会社坪田ラボ、近視予防フォーラム

令和5年度 国立赤城青少年交流の家職員

所長	金澤 哲哉
次長	齊藤 裕徳
主任企画指導専門職	竹内 正則
企画指導専門職	小林 大輔/杉山 直弥/中山 太平/平澤 輝樹
事業推進係主任	中谷 仁
事業推進係員	小林久瑠美/小野 北斗/阿佐美幸子/吉田 賢/ 小淵 早苗/松井莉乃羽
総務係長	逸見 博俊
総務係員・看護師	鈴木 和子
総務係員	寺田 里美
管理係長	長谷川敦子
管理係主任	白石 崇尋
管理係員	新藤 祐司
学生サポーター	細田 希星